# サン・テグジュペリの『人生に意味を』の内容と解説（I）

加　藤　宏　幸

クロード・レナール Claude Reynal は，『人生に意味を』*Un sens à la vie*[1] の「序文」において，次のように述べている。「この書物を構成する未刊の作品は，年代順に整理され，原文のまま再録されている。それらは新しい発見をさせてくれるであろう。それらを読むことによって，中編小説家，ルポルタージュ作家，論説記者，序文執筆者としてのサン・テグジュペリの知られざる面を知ることができるからである」[2]。「サン・テグジュペリが手慣れていないさまざまな文学ジャンルに，一時的にしかし見事に取り組み，われわれを力づけてくれるこの書物において，われわれは，人生に意味を与えようとする行動的思想家の考えを難なく理解できる」[3]

この書物に収められた，小説とは異なる作品の内容を簡潔に示し，解説を加えることによって，人生に意味を与えようとするサン・テグジュペリという行動的作家の本質により深く迫りたいと思う。

## I.『飛行家』 *L'aviateur*

**内容**　プロペラが激しく回転し，騒音が高まって行く。騒音が体に満ちたとき，パイロットは，「これでよい」と思う。彼は身をかがめ，友人たちに別れを告げる。ベルトとパラシュートの革帯を留めるとき，あたりに奇妙な沈黙が支配する。計器板と翼への最後の一べつ。エンジンに点火し，飛行機は空中に突進する。地面はぴんと張り，車輪の下に革帯のように繰り出されて行く。初めは感知できなかった空気は流体のようになり，今は固体になったように思える。パイロットはその空気にもたれ，上昇する。高度 200 メートルに達すると，子供が描いた田園画のような風景が眼下に広がる。

大気のうねりは高く，大気の渦が翼を打ち，飛行機は鳴り響く。3000メートルに達すると，飛行機は安定し，渦に巻き込まれることはない。大地ははるかかなたに遠ざかり，凝

1) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Un sens à la vie* (*Œuvres complètes de Saint-Exupéry*, tome III, Paris, Éd. du Club de l'Honnête Homme, [© 1976], pp. 43-282).
2) *Ibid.*, p. 45.
3) *Ibid.*, p. 49.

結し全く動かない。

海の上に出る。エンジンが突然奇妙な音を立てたので，パイロットは驚く。エンジンの回転数を調節する。今度はエンジンが震動する。ガスレバーのナットが緩んでいた。

くっきりと区切られた畑，幾何学模様の森，村々を見ると安心する。高い空から見ると，大地は裸で死んでいるように見えるが，降下すると，大地は衣裳をまとう。着陸は期待外れである。窒息しそうな静かな田舎を見ることになるからである。機体に沿って滑り降りる。酔いがさめた今，死ぬほど悲しい気持ちになる。

飛行を終え，ジャック・ベルニス Jacques Bernis は自分の部屋に戻った。彼は大通りを登って行く。人々の平安な顔は，彼には耐え難い。ダンスホールに入る。目に触れる女たちの視線はそらされ，青年たちは道を開け彼を通す。

パイロット訓練部隊に配属されたベルニスは，飛行場のそばの宿屋で昼食をとりながら，下士官たちの話に耳を傾ける。故障のため降下し，農家の中庭を滑走し，堆肥に激突した事故などについて語っている。彼は，率直な下士官たちに愛着を覚える。

練習生ピション Pichon と教官ベルニスの乗った飛行機が飛び立つ。ベルニスは練習生に，操縦の基本的原則を教える。異常が起きたら，電源を切り，眼鏡をはずし，火災の場合には脱出する。

みんなモルティエ Mortier を待っている。彼は帰還しているはずであった。航路を見失ってしまった彼は，目標を探している。霧は深く，10メートル先も見えない。飛行機が突進して来る。みんながつぶれた飛行機に駆け寄る。パイロットはようやく救出されるが、顔は緑色で，左目は大きくはれ，歯は折れている。練習生ピションは，人が死んでも大騒ぎしてはいけないということを学ぶ。彼は明日また訓練飛行に飛び立って行くだろう。

高度4300メートル，ベルニスはたった一人である。彼は考える。もはや自分の陶酔を，心をゆすり生気を与えてくれる夢に求めるべきではなく，自分の力から引き出さなければならないと。スピードを上げる。地平線は潮のように後退し，飛行機は大空に向かって上昇する。

**解説** クロード・レナールは「序文」で，この作品について次のように述べている。「この作品は，サン・テグジュペリによって書かれた最初の作品である。中編小説『ジャック・ベルニスの脱出』*L'Évasion de Jacques Bernis* の抜粋であるが，その原文は紛失してしまった。アドリエンヌ・モニエ Adrienne Monier の主宰する雑誌「ナヴィール・ダルジャン(銀の船)」*Le Navire d'argent* の編集責任者ジャン・プレヴォ Jean Prévost が，1926年4月号に，『飛行家』という題で，その重要な抜粋を発表した。プレヴォは，この新人の直接的な技法と生来の真率さに心を打たれた。いくつかの部分は，主要な作

品の特性を備えている。サン・テグジュペリはすでに，自分の文体を完全に所有している」[4]

雑誌「ナヴィール・ダルジャン」の紙数には限りがあったので，新人作家サン・テグジュペリの作品は，八つの断片しか載せられなかった。モニエにはこの雑誌を継続出版する資金が尽きていたので，1926年4月号が最後の号となった。断片しか掲載されなかったにしても，『ジャック・ベルニスの脱出』は，彼の作家としての出発点となった。

エリック・デショッドは，『飛行家』について次のように述べている。「ケッセル Kessel の『飛行機搭乗員』*L'Équipage* を読んでいなかった，アドリエンヌ・モニエの雑誌の読者は，1926年4月に，初めて航空機について知った。発表された断片から，元の小説は，愛しはしたが愛されず，単座戦闘機の左翼の破損によって中断されたアクロバットショーで死ぬパイロットの話であることが理解できる。

編集責任者が選んだ断片は適切であった。一つを除いて，未来の作品のすべてのテーマがこの作品に集められている。裏切られた愛，出発，職業のかけがえのない尊厳，飛行実地訓練，危険の無視，死の受容」[5]

『サン・テグジュペリ全集』の第3巻に載っている『飛行家』からは，デショッドが述べているような元の小説の全体像を知ることはできない。「ナヴィール・ダルジャン」に発表された『飛行家』という小説は，同じように断片であったにしても，『全集』に再録されたものより詳しく紹介されていたのかもしれない。

『飛行家』において特徴的なことは，搭乗パイロットを通して，飛行機の離陸から着陸までのさまざまな出来事が，かなり詳しく描かれていることである。離陸前の飛行機のエンジンの調子，パイロットの搭乗，計器の点検、発進の動作，眼下に広がる田園画風の風景，3000メートルでの飛行機の安定。

回転速度計の針が揺れ，エンジンが奇妙な音を立てる。冷汗が流れる。目的地の上空に到達し，降下を開始する。

> 「くっきりと区切られた畑，幾何学的な森と村々，大地は安心させてくれる。パイロットは，大地をもっとよく味わおうと身を乗り出す。上空から見ると，大地は死んでいるようだ。飛行機が降下すると，大地は衣裳をまとう。森が再び大地を覆い，谷や丘が大地にうねりを印し，大地は呼吸し始める」[6]

着陸する。額を下げ，油で光っている手を見つめる。酔いがさめ死ぬほど悲しくなる。飛行を終えたベルニスは，自分の部屋に戻り，友人に電話する。街に出て，ダンスホー

4) *Ibid.*, p. 45.
5) DESCHODT (Eric), *Saint-Exupéry, biographie*, J.-C. Lattès, [© 1980], p. 82.
6) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, p. 58.

ルに入る。彼は酔いしれた人々の中にあって，ただ一人理性を持ち続け，彼の思考は依然として明晰である。

このような飛行機の離陸から着陸までの出来事の描写，パイロットの行動と心理の描写は，この作品を読んだ読者にとっては全く目新しいものであった。読者は初めて，飛行機とパイロットについて知った。ケッセルの『飛行機塔乗員』につづいて，また新しい航空文学が誕生したのである。

またこの作品では，いくつかの飛行機事故のエピソードが語られる。事故のため，農家の中庭を滑走し，堆肥に激突し帰還した下士官の話。干し草の山にぶつかって生還した下士官の話。霧の中での着陸に失敗し，障害物に激突し，重傷を負ったモルティエの話。モルティエの事故を眼前に見て，人が死んでも大騒ぎするほどのことではないことを理解する練習生ピションの話。同僚の死にめげず飛び立って行くパイロットの姿は，サン・テグジュペリの主要な作品に繰り返し描かれることになる。

『飛行家』はサン・テグジュペリが26歳のときに発表した作品であるが，この時期すでに，彼はパイロットになる決心をしていたのである。そのことは，次の文から読み取れるだろう。

> 「高度4300メートル，ベルニスは孤独だ。彼は，地図帳のヨーロッパのように区画された世界を見つめる。人間の誇りと心づかいを示している，小麦の黄色い土地とクローバーの赤い土地は，敵意を見せて並んでいる。闘争と嫉妬と訴訟の10世紀が，おのおのの輪郭を固定した。人間の幸福は，囲いの中に入れられてしまっている。
>
> ベルニスは考える。自分の陶酔は，ゆすり活気づけてくれる夢に求めるべきではなく，自分の力から引き出さなければならない」[7]

サン・テグジュペリの主要な作品の文体については，次のように言うことができる。「密度の高い，イメージに富んだ散文は，本質的に詩的である。サン・テグジュペリは，駆使し得る文章のあらゆる秘訣を知っている。あるときは，牧歌的で繊細な，みずみずしい文章を描き，あるときは，劇的で悲痛な，激しい調子の文章を描く」[8]。その文章は，詩的であるとともに音楽的でもある。これは天賦の才にもよるが，音楽的な素養にもよる。「驚嘆すべきことは，彼の文体が深く人間的であることである」[9]。それは，彼自身と同じように真率で誠実で魅力ある文体である。それは，彼の心の直接的な反映である。

『飛行家』の文章について言えば，それは，「牧歌的で繊細な，みずみずしい文章」[10]に

---

7) *Ibid.*, p. 67.
8) SAINT-EXUPÉRY, *Terre des hommes* (*Classiques Larousse*, *Notice*, p. 20).
9) *Ibid.*, p. 20.
10) *Ibid.*, p. 20.

は至ってはいないが，「劇的で悲痛な，激しい調子の文章」[11]ではある。その文章は，何よりも真率で誠実な彼自身の反映である。この点から見ると，この作品を書いた当時，サン・テグジュペリはすでに，彼自身の文体を所有していたと言うことができる。この作品の文体に，詩的な要素，音楽的な要素，豊かな抒情味が加わって，主要作品の文体である彼自身の文体が完成する。

## Ⅱ．ルポルタージュ

『モスクワ』*Moscou*――「サン・テクジュペリのロシア旅行は，1935年4月から5月にかけて行われた。それは，コンティ Conty とプレヴォ Prévot を伴っての地中海一周の講演旅行の直後で，シムーン Simoun 機に乗ってのパリ―サイゴン間の悲劇的長距離飛行への出発直前のことである。／サン・テグジュペリは4月29日にモスクワに到着した。／『人間の土地』*Terre des hommes* の最後の数ページに，「虐殺されたモーツァルト」*Mozart assassiné* として，この旅行の思い出が描かれている。／「パリ・ソワール」*Paris-Soir* 紙，1935年5月3日，14日，16日，19日，20日，22日号参照」[12]

**内容**　「1000機の爆音のもとで，モスクワ全市は革命記念日を祝った」――5月1日の前夜，サン・テグジュペリは通りに出て，祭りの準備を見て回る。スターリン Staline の住むクレムリンの周囲は厳重に監視されていて，全く近付けない。スターリンは存在していないと言ってもいいほど，彼の存在は人目に触れることはない。しかし彼の肖像画は，町中のいたる所に飾られている。どうして，スターリンはこれほどまでに人気があるのか。彼は民衆を建設へと駆り立てることによって，飢餓と貧困から民衆を抜け出させたからである。

5月1日の明け方，サン・テグジュペリは通りの空気を吸おうとしたが，ホテルの扉は閉められていた。証明書を持たない者は，外に出ることが禁じられた。やがて，モスクワ上空を飛ぶ1000機の飛行機が地面を揺るがす。ついに彼は，ホテルの窓からこっそりと抜け出す。赤の広場に通じるにぎやかな通りに出る。

> 「民衆は，峻厳な態度で，黒い熔岩のように少しずつ前進していた。一民族全体の行進は，1000機の飛行機の飛行と同じように，陪審員の全員一致の判決のように非情な何かを感じる。〔……〕この人々は，労働着，肉体，思想においても，その根源まで規制されている」[13]

---

11）*Ibid.*, p. 20.
12）SAINT-EXUPÉRY, *Un sens à la vie*, p. 71.
13）*Ibid.*, pp. 76–77.

突然，奇蹟のようなことが起こる。それは，人間への回帰であり，この統一体の生きた個人への細分化である。アコーデオンの音が高く鳴り響き，ブラスバンドが演奏を始め，民衆が踊り出したのである。

「ソビエト連邦に向かって，夜汽車の中で，送還される鉱夫の真ん中で，子供のモーツァルトが眠っていた……。その子供は，伝説の小さな王子と少しも変わらなかった」――サン・テグジュペリは，国際線の急行に乗っていた。午前1時ごろ，列車の端から端まで通り抜けてみた。寝台車も1等車も空だったが，3等車は解雇されてポーランドへ帰る労働者で一杯であった。包みの中には，台所道具と毛布とカーテンしか入っていなかった。

だらしない姿で眠り込んでいるこれらの人々は，粘土の塊のようであった。サン・テグジュペリは，一組の夫婦の前に座った。両親の間で眠っていた子供が寝返りを打ったので，その子供の顔が常夜灯に照らされた。なんと美しい顔であろう。黄金の果実が，この夫婦から生まれたのである。彼は思う。「これこそ音楽家の顔だ。これこそ子供のモーツァルトだ。この子供には，すばらしい人生が開かれている」。保護され，援助され，養われれば，何にでもなれるのではなかろうか。だがこのモーツァルトも，ここで眠っている粘土のような男になってしまうであろう。サン・テグジュペリを苦しめるのは，ぼろをまとった貧しい人たちではなくて，こうした人たちの中に隠れている「虐殺されたモーツァルト」である。

列車はフランスの国境を越えて，ドイツに入る。すべてがフランスとは違っている。ドイツ人がサン・テグジュペリに話しかける。「どうしてフランス人は，ロシアに対する防壁であるヒトラーを恐れるのですか。彼は，今日の民衆に，自由な民衆としての資格を取り戻させてくれたにすぎません。彼は町々に大きな直線道路を造り，後世に残そうとする人物の一人です。秩序の象徴なのです」。ひと度フランスの国境を越えると，人間の運命について関心を抱かざるを得なくなる。

「モスクワ！　しかし革命はどこにあるのか」――ソビエト連邦を評価しようとすると，その見方によって，賛嘆から敵意までさまざまに分かれる。人間の創造を重視するか，個人の尊厳を重視するかによって。サン・テグジュペリはモスクワ駅に着いた。赤帽も他の国の赤帽と同じであり，数珠つなぎの電車も女行商人も見られた。日常生活の領域には，驚くべきことは何もない。ほかの所に，この土地が，革命によってどんなに深く掘り返されたかを見い出さねばならない。

「罪と罰。ソビエトの裁判」――サン・テグジュペリは，ソビエトの裁判官と話をした。

その裁判官は言った。「罰することが問題ではなく，正しい道に導くことが大切なのです」

「この裁判官は，自分の判断で人を裁くことは許されない。彼は，何物にも眉をひそめることがない医者に似ている。手当が可能なら手当をする。しかし，何よりもまず社会に奉仕する者であるので，手当が不可能なら銃殺する。だから，受刑者のどもりも，ふくれ面も，われわれに彼に対してほのかな親しみを起こさせるリューマチも，裁判官の寵愛を得させない。

その点には，個人 l'individu の完全な無視が存在し，個人を通して永続し，個人の偉大さを築き上げることが問題となる人間 l'homme に対する強い尊敬が存在していることを，私はすでに見抜いていた」[14)]

裁判官は語る。「おどさなければならないとき，公共の権利に対する犯罪が増加するとき，流行を食い止めなければならないとき，われわれはより厳しく罰するのです」。ソビエトにおいては，泥棒，売春斡旋業者，殺人者は牢獄から引き出され，兵士の銃の下で，白海 la mer Blanche とバルチック海 la mer Baltique をつなぐ運河を掘っている。

サン・テグジュペリには，集団への隷属は耐え難いことに思えたが，彼らが一つの社会を建設した今，社会という集合体に組織されなければならない，ということが理解できるように思えた。

「マクシム・ゴーリキー Maxime-Gorki 号の悲劇的な最期」――世界最大の飛行機マクシム・ゴーリキー号が墜落した。着陸しようとしていたとき，戦闘機が時速 400 キロ以上で衝突したのであった。この飛行機は，翼長63メートル，長さ32メートル。8基のエンジンは，700馬力であった。巡航速度は 260 キロ。巨大な拡声機を備えていて，その声は地上の人々に届いた。

事故の前日，サン・テグジュペリは，マクシム・ゴーリキー号に乗って飛んだのである。この名誉にあずかった最初の外国人となり，また最後の外国人となった。この巨人を殺したのは，不条理な宿命であった。

「過ぎ去った20年を惜しんで嘆く，少し酔ったグサヴィエ嬢と10人の小さな老嬢との奇妙な夜会」――人口4百万のモスクワには，帝政時代に若い娘の家庭教師をしていて，今は60歳から70歳になったフランス女性が 300 人ばかりいる。革命によって古い世界は寺院のように崩れ落ちたが，彼女たちは生き延びた。サン・テグジュペリは，その女性たちの1人のグサヴィエ嬢に会った。彼は，30年以来彼女の家に来た最初のフランス人となった。

14) *Ibid.*, p. 93.

彼女は革命について語ってくれた。わずかのお金を得るために，老人たちから数スーで売ってくれと頼まれた骨董品を売るために，モスクワ中を歩き回った。それは禁止されていたことであったので，ある日一斉検挙の網にかかり逮捕されたが，小娘として扱われ罰せられなかった。

その夜，グサヴィエ嬢は，同じ境遇にある10人の老嬢を，彼女たちの住居のうちでもっとも美しい住居に集めた。みんな少し酔って，古いシャンソンを歌った。彼女たちの目に子供のころのことが思い浮かんで来て，涙が流れた。サン・テグジュペリは，小さな老嬢に抱き締められ，魅力ある王子のようであった。

**解説** 1935年ごろのフランスでは，革命後のソビエト国民の状態についてはほとんど知られていなかった。「パリ・ソワール」紙からモスクワ特派員の話があったとき，サン・テグジュペリはすぐに承諾した。貧窮の中にあったのでお金を稼がなければならないこともあったが，社会主義国がどのようなものか知りたかったからである。出発に先立って，ロシア文明の専門家について，ソビエトについて勉強した。

5月1日の前日，モスクワの町中に10万以上ものスターリンの肖像画が飾られた。スタリーリンがこんなにも人気があるのは，民衆を強制的に建設へと駆り立て，民衆を飢餓と貧困から救い出したからであった。

5月1日の大行進を見物するために，見物席を予約しようとして，フランス大使に依頼してみたが，予約できなかった。5月1日，ホテルは警察によって監視され，誰も外に出ることができなかった。しかしサン・テグジュペリは，こっそりと窓から外に出た。赤の広場へ向かって黙々と行進する民衆，空中を整然と飛行する1000機の飛行機。彼は，この完全な規律と一体性に感動したが，陪審員全員一致の判決のような非情なものを感じた。ここでは，仕事着，肉体，思想のすべてが完全に規制されている。

サン・テグジュペリは，民衆に厳しい規制を課すスターリンに対しても，スターリンに忠実に従っている民衆に対しても，全く批判を加えていない。赤の広場への沈黙の行進の途中で，アコーデオンの演奏に合わせて突然民衆が踊り出したことに，彼は深く感動する。彼はそこに，統一体の個人への細分化，人間的なもの l'humain への回帰を認める。

サン・テグジュペリは，モスクワ行きの国際列車の中で，解雇されて祖国に戻るポーランド人の炭坑夫を見る。彼らは粘土の塊のようになってしまい，死んでいるかのようである。一組の夫婦の間に，子供が1人眠っていた。常夜灯に浮かび出たその子供の顔は美しかった。黄金の果実，魅力と優美の結晶が，汚い衣服を着た夫婦から生まれたのだ。「子供のモーツァルト」がそこにいた。このモーツァルトもやがて，その両親と同じ姿になる運命にある。モーツァルトは虐殺されてしまうのだ。「虐殺されたモーツァルト」の話は，

1939年に出版される『人間の土地』の中で再び言及されることになる。

サン・テグジュペリの目は，ポーランドの炭坑夫を粘土の塊にした当時の社会・経済状況には向けられず，炭坑夫とその子供にだけ向けられている。彼は炭坑夫をこのような状態に陥れた原因については触れず，もっぱら人間の生き方の問題として捉えている。どんなに苦しい境遇に置かれても，夢と希望を失ってはいけないというのが彼の主張の本質である。彼が常に人間の生き方に強い関心を抱くのは，彼が行動的作家であると同時に，純粋なモラリストであるからである。他の作品においても彼は，行動することを通して人間いかに生くべきかを追究している。

サン・テグジュペリは，ソビエトの裁判官と話をした。ソビエトでは，裁判官は何よりもまず社会に奉仕する者であるから，自分の判断だけで人を裁けない。そこには，個人を無視し，個人を通して永続する人間に対する尊敬が存在すると，彼は肯定的に述べている。個人よりも永続する人間に対する尊敬の方が重要だとする考え方は，彼の他の作品においても繰り返し述べられている。

ソビエトにおいては，公共の権利に対する罪が増加するときには，その流行を食い止めるために厳しく罰する。軍隊が解体しそうなときには，みせしめのために銃殺する。しかし，このような場合以外であれば，罪人を国家に奉仕する有能な人物に矯正する。サン・テグジュペリは，このような裁判の基盤については，裁判官に同意するが，監視状態，国内パスポート，集団への隷属は耐え難いと述べている。サン・テグジュペリは，ソビエトにおける個人を無視した裁判のあり方を批判することはせず，むしろ賛同の意を示している。ここにも，普遍的人間の偉大を重要視する彼のモラリスト的姿勢を認めることができる。

『血塗られたスペイン』*Espagne ensanglantée*——膨大な赤字をもたらしたパリ—サイゴン間の長距離飛行の後で，サン・テグジュペリは，心配を抱いてエジプトから帰国した。スペインに内乱が起こるやいなや，「ラントランジジャン」*L'Intransigeant* 紙は，彼にスペインに行くよう要請した。彼は承諾し，1936年8月初旬，飛行機でバルセロナ Barcelone に向かい，レリーダ Lerida 戦線のルポルタージュを書き，強い衝撃を受けて戦線から戻った。／「ラントランジジャン」紙，1936年8月12日，13日，14日，16日，19日号参照」[15]

**内容**　「バルセロナへ，内乱の目に見えない境界線」——サン・テグジュペリは，ピレ

15）*Ibid.*, p. 115.

ネー山脈を越え，スペインのフィゲラス Figueras 上空に到する。火事や廃墟や民衆の困窮のしるしが全く発見できず驚く。燃えてしまったと聞いていた教会は，日の光を受けて輝いている。

バルセロナの民衆は静かであった。武装した民兵のバリケードにぶつかることがあっても，ほほえみさえすれば通り抜けることができた。内乱においては，境界線は目には見えず，人の心の中に引かれているのだ。

しかし，カフェのテラスに座っていたとき，突然4人の男が隣の男の腹に銃身を突き付け，その男を連行した。

「アナーキストの品行とバルセロナの街角の光景」——バルセロナを掌握しているのはアナーキストである。武装蜂起の最初の朝，機関銃士に援護された砲兵に向かって突撃し，大砲を奪った。勝利したのち，彼らは兵舎に入り，武器と弾薬を押収し，町を小さな砦に変えてしまった。

サン・テグジュペリの宿泊していたホテルの民兵たちは，みな忙しく立ち働いていた。政府がアナーキストを武装解除するかもしれないという噂が町に流れていたからだった。

午前1時，大砲を引いた部隊が舗道の上を進んでいた。前線へ向かっているのだ。

「内乱，それは戦争ではなく，病気である」——サン・テグジュペリは，アナーキストたちに案内され，兵士の出発駅へ行った。そこはやさしい別れの言葉が交わされるプラットホームではなく，転轍機と信号の砂漠であった。兵士たちが，プラットホームに大砲や機関銃を積み上げている。静かで，歌声も叫び声もない。そこには，病院の雰囲気がただよっている。内乱，それは戦争ではなく，病気である。

> 「兵士たちは，征服の陶酔にひたって襲撃に向かうのではなく，ひそかに伝染病と闘っているのだ。前線の野営地でも同じだ。その戦闘によって敵を国土の外に追い払うことが問題ではなく，病気を治すことこそが問題なのだ。新しい信仰はペストに似ている。それは内部から攻撃して来る。それは，目に見えない所で広がって行く。そして党派に属する人たちは，通りに出ると，彼ら自身確認できないペスト患者に囲まれているような気になるのだ」[16)]

この戦争は，ほんとうに恐るべき様相を呈するだろう。戦うよりもむしろ銃殺する。石灰か石油をまいて，汚水処理場では死体を焼いている。人間に対する尊敬は全くない。ここでは，人間は単に壁にはりつけにされ，内臓を吐き出すのだ。

16) *Ibid.*, p. 124.

「戦いを求めて」――サン・テグジュペリは，前線から20キロのところにあるレリーダにやって来た。バルセロナより静かだった。次の日，戦闘地帯に車で向かう。バリケードの数が増加し，その度に革命委員会と長々と交渉しなければならない。前線の状況は非常に複雑である。味方の村，反乱軍の村，不確かな村が，朝から晩までの間に変わって行く。

脱穀機がうなっている。誰もがここでは，人々のパンのために働いている。労働者がほほえみかける。このように美しい光景は全く予想していなかった。

最前線に来る。舗石で造られた壁が道路を見下ろし，六つの銃口がこちらに向けられている。800メートル先に反乱軍がいるので，これ以上進むことはできない。民兵と反乱軍は対峙しているが，2週間以来戦闘は全く起きていない。2日間前戦で過ごしたが，1発の銃声も聞かなかった。

「戦略家や大砲や部隊が存在しているにもかかわらず，ここでは真の戦いは起こらないように思える。誰もが目に見えないものの中に，何かが生まれるのを持っているのだ。反乱軍は，マドリード Madrid の無関心な人々の間に，支持者が現れるのを待っているのだ。バルセロナは，サラゴーサ Saragosse が夢を吹き込まれ，社会主義者として目覚め，陥落するのを待っているのだ。進軍しているのは思想である。包囲するのも，兵士というよりはむしろ思想である……。思想こそ，大きな希望であり，大きな敵である」[17]

「ここでは伐採するように銃殺する……。人々はもはや互いに尊敬し合うことはない」――サン・テグジュペリの一行は，リストに記されている人たちの救出へ向かった。山の中のある村へ行ったが，そこでは17人のファシストが銃殺されていた。テロリストは，澄んだ目をした律義な農民たちだった。彼らにフラン人僧侶のラポルト Laporte のことを尋ねたが，彼らは知らないと答えた。彼らによって殺されたことは確実だった。

別の村では，1人の僧侶を返してくれた。その僧侶は森に逃げ込んだが，空腹のため森から出て来た。そのときテロリストに撃たれたが，夜だったので弾が当たらなかった。

野原で激しい一斉射撃の音がしたので，一行は車から降りた。一斉射撃の音が消え，静寂が再び訪れた。誰かが死んだのである。1人の若い娘が，男の兄弟たちと一緒にいるところで殺されたという話だった。

「人間の出来事には二つの面があるようだ。劇的な面と無関心な面と。すべては，個人に関することか人類に関することかによって変わる。移動とか緊急な変動の時期には，人類は死者のことを忘れる」[18]

17）*Ibid.*, p. 131.
18）*Ibid.*, p. 140.

「私はここで，解決できない矛盾に突き当った。というのは，人間の偉大さは，人類の運命だけによって作られるものではないからである。一人一人の個人は一つの帝国 un empire なのだ」[19]

鉱山が崩れて，1人の鉱夫が閉じ込められたとき，仲間たちは危険を冒して，その鉱夫を救出しようとする。一つの良心 une conscience，その重要さが測定できない一つの帝国を救おうとする。自分たちが死ぬことがあっても，たった一人ではあるがすべての人につながる鉱夫 mineur universel を救おうとするのである。1人の鉱夫は1000人の人間の死に値する。

全人口からみれば，12人の犠牲者など取るに足らないとか，生き続けている町から見れば，いくつかの教会が焼かれても大したことではないというこのような計算は拒絶する。ここでは，人間の価値が忘れられている。

「人々はもはや互いに尊敬し合うことはない。彼らは無情な執達吏となって，自分たちが一つの王国を全滅させているのだとも知らずに，風に向かって動産をまき散らしている。ここには，二，三度変わりはするが，後には死者しか残さない基準の名において，粛清する権利を自分のものとしている委員会がある。ここには，離教を粉砕する予言者のごとく，平然として全民衆に有罪の判決を下す，モロッコ兵の先頭に立つ将軍がいる。ここでは，伐採するように銃殺する……。

スペインでは，民衆は戦っている。しかし個人は，この世界は，立坑の奥からむなしく救いを求めている」[20]

**解説** スペイン内乱[21]——1936年2月スペインの総選挙で人民戦線派が勝利した。これに対して，フランコ将軍らの軍部首脳は，ひそかに政府打倒計画を準備した。スペイン本土各地に起こった軍隊の反乱に対して，政府側は武力抗争の方針を決定した。ドイツ，イタリアの援助を得たフランコ軍は，1936年8月大軍をモロッコから本土に上陸させ，9月末には本土の約3分の2を占領した。

ドイツ，イタリアがますますフランコ援助を増強したのに対して，イギリス，フランスは不干渉の名目を固執したので，スペイン人民戦線政府は窮地に陥った。これに対して，ソ連は10月人民戦線側への武器援助を開始した。

反乱軍は1936年10月ブルゴスにフランコを首席とする国民政府を樹立した。ドイツ・イタリア軍，フランコ軍の優勢な武力に押されて，人民戦線側は敗色を濃くした。人民戦線

19) *Ibid.*, p. 140.
20) *Ibid.*, p. 143.
21) スペイン内乱の説明は，『学芸百科事典エポカ』（第10巻，旺文社，186—187ページ）の「スペインないらん」の要約。

政府は1936年11月バレンシアに，1937年10月バルセロナに移った。1939年１月26日バルセロナは陥落した。３月28日，スペイン人民戦線は最終的に敗北して，フランコ体制がスペインを支配するようになった。

サン・テグジュペリは，スペイン内乱の初期，1936年８月の初旬に，「ラントラジジャン」紙の特派員としてバルセロナにやって来て，町の状況を報告した。町はアナーキストによって掌握され砦に変えられていたが，民衆は平静である。相対立する陣営の境界線は人々の心の中に引かれていて目には見えない。前線へ向かう部隊を見かける。戦闘はどこかで確かに行われている。

サン・テグジュペリは，第３報でこの内乱について分析する。「内乱は戦争ではなく病気である」。新しい信仰はペストに似ていて，内部から攻撃して来る。党派に属する人たちは，自ら確認できないペスト患者と戦っている。コミュニスト，アナーキスト，ファシストなどさまざまな集団が存在し，他の集団に所属しているのではないかと疑われただけで銃殺されてしまう。各党派はペスト保菌者を探し合っている。敵と味方との戦闘によってではなく，疑うことによって殺し合う内乱の実情を生々しく伝えている。

サン・テグジュペリは，バルセロナからレリーダの前線に行き，前線を取材した。最前線では，相対立する陣営がかなり近い間隔をへだてて対峙しているが，戦闘は行われてはおらず，農民が畑を耕している。２日間前戦で過ごしたが，１発の銃声も聞かない。反乱軍は，マドリードの無関心な人々の間に支持者が現れるのを待っている。バルセロナは，サラゴーサが社会主義者として目覚め陥落するのを待っている。進軍するのは思想である。内乱の初期であったにしても，最前線では戦闘が行われず，相対立する陣営がそれぞれの支持者がふえるのを待っている内乱の現実の姿を伝えている。

サン・テグジュペリは，友人たちと同胞の救出へ向かった。ある村ではすでにフランス人僧侶は殺されてしまっていたが，ある村では１人の僧侶を救出できた。またある村では，１人の若い娘が殺されたという話を聞いた。人が殺されても誰も悲しまなくなってしまっている。

このような有様を見て，サン・テグジュペリは考えた。人間の偉大さは，人類の運命だけによって作られるのではない。一人一人の個人は一つの帝国であり，個人の死は帝国の滅亡である。人々は互いに尊敬し合うことはない。一つの王国を壊滅させようとしている。モロッコ兵の先頭に立つ将軍（フランコ将軍）は，平然として全民衆に有罪の判決を下している。ここでは，木を伐るように銃殺が行われている。日々無意味な死が累積されて行く。

個人個人はその意味ある行為によって人間の偉大さを作り出すのである。それ故，個人

は人類の未来と結ばれている。個人の無駄な死は人間の尊厳を汚すものである。人間をより偉大にした個人の死が数多く存在したが，ここでの個人の死は人間の偉大さを破壊するものである。スペインでは，民衆は戦っているが，個人は救いを求めている。個人の救いを訴える，サン・テグジュペリのスペインからのこの第5報は感動的である。

『マドリード』*Madrid*——「1937年6月，サン・テグジュペリは，「パリ・ソワール」紙の特派員としてマドリードに現われる。以下の文章は，マドリードとカラバンチェル Carabancel の前線で書かれた。この文章が元となって，『人間の土地』の一節である「スペイン軍曹の目ざめ」が書かれた。／「パリ・ソワール」紙，1937年6月27日，28日，7月3日号参照」[22]

**内容** サン・テグジュペリは戦争の実態を知りたかったので，中尉に前戦に連れて行ってもらった。田舎道に沿って戦線から1キロ離れたところを進んでいた。道路の左手の盛り土にぶつかり，弾丸が頭上で音を立てる。

突然ごろごろと鳴る音がした。それは，マドリードへ向けての砲撃であった。2キロ離れたマドリードは，砲撃を黙って受け止めていた。80万の住民が死の危険にさらされている。マドリードは，沖に浮かぶ船のようだった。男や女や子供たちで，船は屋根裏から船艙まで一杯である。婦女子が乗った船が砲撃されているのだ。

「私は，今日の午後この町にいて，砲撃を目にした。グラン・ヴィア Gran Via に轟音がとどろき，ただ一人の人命が失われた。通行人は漆喰を浴び，他の通行人は逃げ去り，薄い煙は消えうせた。しかし，奇蹟的に全く擦り傷を負わなかったフィアンセの男性は，1秒前までその黄金色の腕を握っていた婚約者 novia が，血のスポンジ，肉と布切れの塊に変わって，足元に転がっているのを見た」[23]

サン・テグジュペリは，白昼着物を脱がされる少女も見たし，腹を裂かれた主婦や傷を負って醜い顔になった子供も見た。戦争のルールも報復の法則もどうでもいいのだ。誰が戦争を始めたのか。60発目の砲弾がマドリードに打ち込まれる。

中尉とサン・テグジュペリは，カラバンチェルの最前戦へ向かって行った。最前戦は一斉射撃で活気づいている。近くで地雷か砲弾が爆発し，ほこりに包まれる。塹壕にもぐり込む。塹壕の奥には地下室があった。そこで兵士は眠り，見張りをし，換気窓から撃っていた。

夜明け前に攻撃せよとの命令が届いた。15歩も進まぬうちにどれほどの兵士が死ぬであ

22) *Ibid.*, p. 144.
23) *Ibid.*, p. 150.

ろうか。彼らの顔には何の変化もなかった。志願兵としては，命令に従って攻撃するのは当然のことであった。

銃撃が激しくなり，人々は敵を恐れ始め，沈黙に向かって発砲する。応射の音を聞いたように思う。彼らが恐れているのは，人間ではなく幻なのだ。

銃撃がさらに激しくなり，近くの機関銃が震動しているのが見える。突然あらゆる物が爆発したかのように思える。今日死んで，石造の大きな霊廟に祭られるのはいやだ。人を殺したくない。夜であり，戦争であり，怖いのだ。サン・テグジュペリは，地下室に寝に行った。そこには10人ばかりの兵士がいたが，馬鹿話をしたり，チェスをしたりしていた。一体ここはどこなのだろう。

目覚し時計が鳴れば，兵士たちは伸びをし，星の中に飛び込んで行くだろう。

コンクリートの壁に突撃して，ほとんどの人が戦死したにちがいない攻撃命令が取り消されるや，みんなが文句を言い出した。「女性とでも思っているのか」。「戦争をしているのか，していないのか」

夜明けの休戦が訪れた。兵士たちは東屋の下に集まって来て，生きていることを確認し，白いパンとたばことほほえみを分け合う。

サン・テグジュペリは，新しい生活を始めたこの男たちを，特に先頭に立って突撃することを命ぜられ，突撃の前に寝に行った一人の軍曹を見つめていた。サン・テグジュペリは，死刑囚の目覚めと同じような彼の目覚めの場に居合わせたのであった。

軍曹は，弾薬盒，拳銃，革の負い紐，ベルトを身に付けて眠っていた。「おい！軍曹！」と呼ぶと，重い溜息を漏らし，寝返りを打ち，苦しそうな顔を見せた。もう一度溜息をつくと，死ぬのをいやがる動物の執拗さで，壁に顔をぶつけて向こうを向いてしまった。「おい！軍曹！」とまた呼んだ。瞼にしわが寄り，口が動き，手を額に持って行き，ダイナマイトと疲労と凍りついた夜でできた世界を拒否して，幸福な夢の中に戻ろうと努力した。軍曹はついに目をゆっくりと開け，ベッドの上に座り腕を銃の方へ伸ばした。そのとき，攻撃の中止が知らされた。サン・テグジュペリは，そのときの軍曹の感動的な顔を決して忘れることはないだろう。

バルセロナで会計係をしていて，政治には無関心であったこの軍曹がなぜ戦いに参加することになったのだろうか。友人が１人，そしてまた１人志願した。彼は変化して行った。自分の仕事がくだらなく思えて来た。友人の１人の戦死のニュースが届いたとき，彼は急に出発する気になった。

「移住の時期が来て，野生の鴨や雁が渡って行くとき，飛んで行く鳥たちの下の土地に奇妙なうねりが起こる。大きな三角形を形成して飛んで行く鳥たちに引きつけられたかのように，家禽たちが下手な跳躍を始め，数歩で落ちてしまう。野生の叫び声

が，鋭い銛で鳥たちの中にある野生の痕跡をたたいたのだ」[24]

「君を動ごかしたその叫び声は，おそらくあらゆる人々を悩ますものなのだ。犠牲と名づけられるにせよ，詩と名づけられるにせよ，冒険と名づけられるにせよ，その声は同じものだ。しかし家庭の安全が，その声に耳を傾けようとするかもしれない，われわれの中にある部分をしっかりと抑えつけてしまっている。われわれは二，三度羽を震わせて，中庭に落ちる。われわれには思慮分別がある。大きな暗闇に向かって，われわれの小さな餌食を放つのを恐れているのだ。しかし，軍曹，君は商人の活動，その小さな喜び，その小さな欲求がむなしいことを発見する。ここでは人々は生きてはいけない。そして君は，理解した訳ではなかったが，大きな叫び声に従うことを承諾したのだ。そのときが来た。君は脱皮しなければならない。君は帆を一杯に広げなければならない」[25]

このようにして軍曹は，心の中の移住に押しやられるのを感じ，前戦へ向かって出発した。

「しかし君は，あらゆる付属的なものを取り去ってくれた夜の試練を利用して，君から生まれながら，君が知らなかった一人の人物を発見したのだ。彼の偉大さを発見した君は，もう彼を忘れることはできないであろう。それは君自身なのだ。まさにその瞬間に自己を完成し，富を蓄えるための未来は今までほど必要でなくなったことに，君は突然気が付く。滅ぶべき富にもはや結び付くことがない，万人のために死ぬことを承諾し，普遍的な何物かの中に戻るこの人物は，その翼を広げた」[26]

**解説** クルブ・ド・ロネッ・トム Club de l'Honnête Homme 版の『サン・テグジュペリ全集』第3巻の注によれば，彼がマドリードに来たのは1937年6月となっている。しかし，エリック・デショッドの『サン・テグジュペリ，伝記』によれば，彼がマドリードに来たのは4月の後半で，「パリ・ソワール」紙に3編のルポルタージュを発表したのは，フランスに帰国してからとなっている。

サン・テグジュペリがマドリードに着いたのは1937年の4月後半であるとすれば，前回「ラントランジジャン」紙の特派員としてスペインを訪れてから約8カ月後のことになる。8カ月ぶりに訪れたスペインでは，内乱の状況は大きく変化していた。ドイツ・イタリア軍に支援されたフランコ軍は，マドリードを包囲し，町に激しい砲撃を浴びせていた。町の中には，砲撃によってフィアンセを失った男，腹を裂かれた主婦，傷を負った子供を見

24) *Ibid.*, p. 168.
25) *Ibid.*, p. 170.
26) *Ibid.*, pp. 171–172.

ることができた。

夜サン・テグジュペリは，スペインの中尉に案内してもらい前線に行き，砲撃を目撃した。80万人の男女を満載したマドリードという船が砲撃を受けているように見えた。

前線では，突撃を目前にした志願兵たちと一緒になった。塹壕の奥に入って行くと，10人ばかりの兵士が馬鹿話をしたり，チェスをしたりしていたので，ここが戦場なのかどうか分からなくなった。確実に死ぬことになっている突撃の命令が中止されるや，みなが文句を言い出した。

サン・テグジュペリは，先頭に立って突撃することになっていた一人の軍曹の目覚めに立ち会った。「軍曹」と呼んだが，死を嫌がる動物のようになかなか目覚めなかった。やっと軍曹が目覚めたとき，突撃命令の中止が知らされた。そのときの軍曹の顔は感動的であった。

軍曹はバルセロナの会計係だった。あるとき彼は，商人の活動，その小さな喜びがむなしいものであることを発見し，大きな叫び声を聞き，志願兵として前戦に来たのであった。そして前戦で夜の試練を受けて，彼は自分から生まれ今まで知らなかった人物を発見した。

サン・テグジュペリは，『マドリード』においても，他のルポルタージュにおけると同様に，戦争の悲惨さや恐ろしさについてはほとんど述べていない。デショッドはこの点に触れて次のように論じている。「彼のルポルタージュには，他のルポルタージュに見られるような，戦争の恐ろしさに対しての嘆きは全く認められない。そのようなものを描いて何になろうか，と言っているように思える。残酷，不正，悪は言うまでもない。それらについて解説する必要は全くない。それらは戦争では行列を形成し，それらが戦争を形成する。しかし，それらの結合だけで戦争を論じ尽くすことはできない。戦争には，悪とは別のものがある。この恐るべき事件の他の当事者より好んで彼がよく付き合うアナーキストと付き合っていて，彼は戦いは屈辱を受けた者や侮辱された者の地上における最後の頼みの綱でもあることを自然に認める。武器を手に取ることは，諦めやこの世の唯一の受け入れ難い行き詰まりに代わるものである。彼はまた，戦争は戦う者にとって，もっとも緊密な友愛の場であることも確認する。そこに彼は，定期航空路でかつて体験した暗黙の一致を再発見する」[27)]

サン・テグジュペリは戦う人々と生活を共にすることによって，戦うことはこの世で行き詰まった人々が救いを求める場であり，もっとも親密な友愛が成立する場であることを確認した。また彼は，ルポルタージュにおいて，戦争の恐ろしさや惨禍を描写し，戦争に対する反対を声高に叫ぶこともない。彼の目は常に戦っている人々に向けられており，そ

27）DESCHODT, *op. cit.*, pp. 240–241.

の人々の英雄的行動や心理を描写する。『マドリード』においては，バルセロナの会計係が，戦うことを通して偉大な人間に目覚める姿を詳細に描写した。このことによっても，サン・テグジュペリが，行動の作家であるよりもむしろ人間観察を主眼とする純粋なモラリストであることを知ることができる。

スペイン内戦の取材は，国民戦線側においても，フランコ側においても可能であったが，サン・テグジュペリは常に国民戦線側に身をおいて取材した。フランコの名を聞いただけで，彼が怒りを爆発させたと，彼の友人のアンリ・ジャンソン Henri Jeanson が報告している[28]。このことから，彼が国民戦線側を支持していたことは明白である。国民戦線側の兵士の多くは，貧しい農民とか労働者であった。彼は彼らと生活を共にしながら，スペイン内乱を取材した。彼は党派に属することを嫌ったので，アナーキストでも，共産主義者でも，社会主義者でも，共和主義者でもなかったが，いつも貧しい人々の味方であった。それは，彼の貧しい生活の中での生い立ちに起因するものであった。フランコ側は何よりもまず資産家の党派であり，サン・テグジュペリが支持できる党派ではなかった。

ルポルタージュ『マドリード』は，フランスではかなりの反響を呼んだ。最前線に赴き，生命の危険を感じながら，戦う兵士たちの姿を描写した報告だったからである。それは，内乱という歴史上の一つの大事件の詳細な描写ではなく，内乱の一側面の描写にすぎないが，そこには偽りのない戦いの現実が描写されている。スペイン内乱の実相を補足する資料としての価値はあるが，現代史の資料としては不十分であることを認めざるを得ないだろう。

サン・テグジュペリのルポルタージュは，行動の人ではなくむしろモラリストが書いたルポルタージュである。歴史上の事件の中に飛び込み，生命の危険を冒かして取材したが，その目は常に戦っている人たちに注がれていた。この点に，彼のルポルタージュの価値を認めることができるであろう。

彼のルポルタージュは，その性格において，彼の他の文学作品と共通性を持ち，また他の文学作品に素材を提供している。クロード・レナールは，『人生に意味を』の「序文」において，サン・テグジュペリのルポルタージュについて次のように述べている。「これらのルポルタージュはとりわけ興味深い。そこにはサン・テグジュペリの印象がもっとも自発的な形で述べられており，われわれは彼の思想のもっとも深いところに直ちに運ばれるからである。それらは，『人間の土地』の数節全体，例えば虐殺されたモーツァルト，スペイン軍曹の目覚めの元になった。『城砦』 *Citadelle* の中で発表されることになる，人間の尊重，死，熱情，正義，秩序，慈悲のテーマが，すでにここに粗描されている」[29]

28) *Ibid.*, p. 242.
29) SAINT-EXUPÉRY, *Un sens à la vie*, pp. 46–47.